紹介と批評

エリック・カウフマン（臼井美子訳）『WHITESHIFT　白人がマイノリティになる日』

はじめに

本文と注を含めて八〇〇頁に近い大著（Eric Kaufmann, *WHITESHIFT: Populism, Immigration and the Future of White Majorities*, Allen Lane, UK, 2018. 目次は詳しいが、索引がないので多少読みにくい）が、翻訳され出版された（二〇二三年七月）。タイトルに惹かれ早速読んでみた。白人がマイノリティになったら少しはよい社会が来るとでも書いてあるのかと思ったら随分と違った。確かに米国など、欧米先進諸国では日本も含めて少子高齢化により人口減少が進んでいる。人口減による労働力不足を移民労働者・外国人労働者を大量に受け入れて補い、かろうじて人口を維持している。とくに白人人口の割合が減少している。著者カウフマンは米国、英国、豪州、カナダ、ニュージーランド（以下NZ）などの英米諸国に注目し白人人口が今はマジョリティだが、二一世紀半ばには、非白人人口の急増によりマイノリティとなり、二一世紀後半から二二世紀初頭にかけてマイノリティどころか、消滅することも考えられる。今なんとかしないといけない。そのためにどうすべきか方策を論じるものである。

内容紹介

本書の目次は以下の通りである。

第一章　白人がマイノリティになる世界――ホワイトシフト

第一部　闘争

第二章　ホワイトシフト前章――アメリカ史におけるWASPから白人への転換

第三章　トランプの台頭――移民時代の民族伝統主義的ナショナリズム

第四章　英国――英国保護区の崩壊

第五章　欧州における右派ポピュリズムの台頭

第六章　カナダ特殊論――アングロスフィアにおける右

派ポピュリズム
第二部　抑圧
第七章　左派モダニズム――一九世紀のボヘミアンから大学闘争まで
第八章　左派モダニズムと右派ポピュリストの戦い
第三部　逃亡
第九章　避難――白人マジョリティの地理的・社会的退却
第四部　参加
第十章　サラダボウルか坩堝か
第十一章　白人マジョリティの未来
第十二章　（非混血の）白人は消滅するのか
第十三章　ホワイトシフトのナビゲーション
謝辞・解説（西山隆行）・参考文献および原注

カウフマン自身は白人男性とアジア系女性との間に香港で生まれカナダのバンクーバーと日本で育ち、先祖にはユダヤ人、中国人、コスタリカ人の血が入った混血人だが、見た目には白人として通っている。現在はロンドン大学政治学教授である。なぜだか白人がマイノリティになることをひどく嫌がっているようだ。以下各章ごとに詳しい内容紹介をしたいが、それでは大変長くなる。各部・各章ごとに大まかな紹介をしたい。ただ、第一章は本書の「はじめに」の部分に相当するので多少詳しくみておきたい。

本章では、欧州英米諸国の人口のなかで、白人人口が少子高齢化や新自由主義経済政策に基づく非差別的大量移民政策による非白人人口の急増によって、白人は二一世紀半ばから二二世紀初頭にかけて各国のなかでマジョリティの地位を失うだけでなく、消滅することすら考えられるとする。こうした現状のなかで、現在多くの保守的な白人は大きな文化・生活不安を抱えている。そのため近頃では保守系白人は自らの伝統的な民族文化・言語・生活様式・宗教等のエスニシティの維持と発展を求めて、大量移民政策の見直しや削減、受け入れる人々の選別規制強化を求めている。しかし、このようなことを主流白人が一言でも口にすると、たちまち「ＰＣ（政治的正しさ）」と多文化主義、そして人道主義・反人種差別を推進するリベラル左派と、その影響を受けた左派寄りの政府から非難を受けるだけでなく口を封じられる有様である。こうしたなかで、大量移民政策・ＰＣをめぐって極右・ポピュリストによる反発が始まり、ＰＣや多文化主義、大量移民政策に不安・不満を抱える保守系白人の支持を集めて現在もリベラル左派白人

と極右・保守系白人の対立状況が続いている。対立が激しくなったのは、多文化主義の下で、移民マイノリティの文化や言語は尊重されているのに、白人主流人口の文化や言語は軽視・抑圧されているからで、マイノリティ文化のみ尊重しマジョリティ文化を軽視する「非対称的・非均整な多文化主義」と行き過ぎたPCのせいだと筆者はいう。

現在のような欧州英米社会のなかで白人たちが採用している行動は「闘争（fight）」、「抑圧（repress）」、「逃亡（flight）」そして「参加（join）」の四つである。白人保守系の人々はリベラル左派による抑圧に対抗して闘争あるいは逃亡そして参加を採用している。カウフマンはリベラル左派と右派ポピュリストによる対立や闘争を避け、白人が多文化都市地域から避難・退却することを逃亡とし、結果として地方の白人地域と非白人多文化都市地域に社会が二つに分離することを指摘する。白人と非白人が仲良く共生する参加が理想的だが、白人と非白人の共生である参加が実現するには、いくつかの条件が必要だと筆者はいう。

まず必要なのは、白人も移民異文化マイノリティ同様に自分たちの民族的な文化・言語・宗教・生活様式等のエスニックなものに対する愛着やノスタルジーは強いので、自分たちの文化・言語を守るための人種的自己利益に基づく要求を人種差別であるとして非難せず冷静に対応することである。頭ごなしに否定することは抑圧である。次に多文化主義とPCの行き過ぎを抑えることや、大量移民政策の緩和を一時的にでも実施し白人保守層の不安を緩和することが必要である。白人保守層のこうした要求の強さは欧州英米諸国で行われる各種の世論調査で明らかになっており、リベラル左派は白人保守層の要求をもう少し考慮すべきだとする。また、各種の婚姻統計をみると白人保守層であっても、異人種間結婚が漸増していることが明らかになっており、白人は非白人との共生を嫌うというのはリベラル左派の保守系白人に対する偏見に過ぎないとする。

このようにリベラル左派を牽制すべきとの要求は白人の自己利益追求に過ぎないものだとしつつも、カウフマンは保守系白人の自己利益追求の正当性はそれが非白人に対する差別や不公平にならないという限界があることに注意すべきだと保守系白人に対して釘を刺すとともに、極右・ポピュリストの過剰な要求をも強く批判する。要はリベラル左派と保守系白人の要求のバランスをとることができれば未来は決して暗くはないのである。カウフマンは保守系白人による参加が実現しないと、安定した社会は到来しないとする。他方で、白人が非白人との異人種間結婚を進めて

共生していかないと、白人人口のマイノリティ化や消滅の危険はより高まるとみる。それを防ぐには白人と非白人の結婚を促進し混血白人を増やして混血白人中心の混血社会を作る必要があるとする。

それでは次に、第一部の闘争についてみてみたい。第一部の最初の章である第二章では、最初になぜ今日の闘争状況が生まれたのかについて米国を中心に論じられる。

なぜ今日保守系白人が憂いているような闘争・抑圧・逃亡社会に米国がなったのか。カウフマンはこのような混沌とした社会になった原因は、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて英国系以外の欧州系白人の大量移民が発生し、白人中心とはいえ多文化社会が生まれ、英系アングロ文化への文化的統合・同化が進まなくなり、英系白人による欧州系白人への差別や非白人移民排斥・制限運動が顕著になり、それに対してリベラル左派の自由進歩主義者による反人種差別運動が活発になり、二〇世紀初頭には米国で多文化主義も生まれ、白人保守層の要求や批判的言論が封じられ、そのことによる白人層の不平・不満が闘争社会に繋がったのである。この不満は一九二四年の移民制限法の施行により一時的に収まったが、一九六五年に米国政府による移民への門戸開放政策により非英系白人のみならず非白人移民が大量に入国するようになると、白人保守層による不満も復活し、それとともにリベラル左派の自由進歩主義者や世界主義者（コスモポリタン）の反人種差別運動や多文化主義に基づくＰＣにより白人保守層の言論言動封鎖が一層強化された。この言論封鎖は、公共の場や公共組織（政府機関、司法組織、警察・軍隊、メディア演劇映画、学校や学会など）の様々な場面に普及した。そのため、極右やポピュリストの活動が拡大したことが引き金となって、二〇世紀後半から闘争時代となったのである。

次に以上のような闘争社会のなかでも発生している重要な動きである「ホワイトシフト（Whiteshift）」について論じられる。ホワイトシフトとは、保守系（純血）白人の伝統的民族文化・言語・宗教等のエスニシティ（本書ではほとんど言及されていないが白人性のことか？――評者）が白人と非白人の結婚（同化・融合）により増加する英系混血白人や欧州系移民白人に遷移・伝播していくことをいう。リベラル左派はこうしたホワイトシフトが既に起きていることを軽視・無視しようとするが、カウフマンはＷＡＳＰと呼ばれたかつての米国純血白人支配層は既にマイノリティになっているが、ＷＡＳＰの文化は混血白人や移民白人に引き継がれて米国の屋台骨として現在も機能してい

ることを考えると、純血白人はマイノリティ化・消滅したとしても混血白人が未来の米国社会をまとめていくことになると予測する。カウフマンのいう「白人がマイノリティになる社会」は、混血白人がマジョリティあるいは最大のマイノリティとして社会の中核を構成する社会であり、それは消滅しつつある純血白人と増加しつつある混血白人、そして、非白人と非白人同士の混血多人種・多文化社会になるだろうとする（但しカウフマンはこの多人種・文化社会は最終的に白人と非白人の混血が進み、少数の純血白人や純血非白人を除いて混血白人社会として文化的・社会的に同質的混血白人中心社会になると考えているようだ）。

本書の表題が意味するところは「混血白人がマジョリティになる日」ということである。カウフマンはこのホワイトシフトがより広く生じるためには参加社会が到来すべきだとするが、リベラル左派の多文化主義者や世界主義者はこれを頑なに拒んでいると批判して本章を終わる。

第三章は、米国が第二次世界大戦後も移民国家として大量移民政策を続け多文化社会になるにつれて、保守系白人は米国の伝統的民族文化・価値観が動揺しているとして大きな不安を感じ、大量移民政策の見直しや、多文化主義の行き過ぎへの不満を述べるようになったことを取り上げる。とくに多文化主義により、移民の文化・価値観が保護されているのに対して、主流白人文化はむしろないがしろにされているだけではなく、公共の場所や組織における伝統文化の誇示・表示や主張・提示が抑制されているとの不満を強めていった。とくに多文化主義は不均整であり、マイノリティ文化を保護・支援するだけでなく、アファーマティブ・アクションを促進し、保守系白人が逆差別されているという不満を高めた。しかし、それに対して不平をいうとたちまち人種差別だとのＰＣ批判が返ってくるので白人保守層は沈黙せざるを得なくなった。

この白人保守層の不満を吸収する形で二〇世紀後半には大量移民政策反対を唱える運動や組織や極右（主に白人至上主義者）の活動が活発化し、英語の公用語化運動、メキシコからの不法移民に対する福祉・失業手当の停止やバイリンガル教育反対住民投票（カリフォルニア州提案一八七）などの反移民政策の動きが活発になる。このようななかで保守系白人たちは自分のエスニシティを強く意識するようになっていった。こうして一九九〇年代にはドナルド・トランプの先駆者であるパット・ブキャナンが登場してアメリカ第一主義が唱えられるようになった。この動きを土台にして二〇一六年の連邦大統領選挙に勝利する右派

ポピュリスト大統領トランプが生まれたのである。トランプは、一方で衰退する米国工業地帯ラストベルトの白人労働者の窮乏と救済を訴えて「強い米国の復活」を唱えると同時に、リベラル左派に近い民主党の移民政策を批判し、メキシコからの不法移民を劣等人種呼ばわりするとともに、メキシコとの国境に高い「国境の壁」をメキシコ政府に作らせると宣言しただけでなく、ムスリム系移民の入国制限を唱え、米国の左派と右派の対立を煽りつつ支持を拡大していった。

米国の保守系白人の多くと衰退産業の元民主党支持者であった白人労働者は共和党候補のトランプを支持し、リベラル左派に近い白人中産階級は民主党候補クリントンを支持するという政治的分断・対立の時代が生まれた。カウフマンは米国の大量移民政策論争と多文化主義論争の展開にともなう右派ポピュリズムの展開の歴史を中心に、米国闘争社会の歴史を明らかにし、問題の原因を、リベラル左派の大量移民政策と不均整な多文化主義と行き過ぎたＰＣ、アファーマティブ・アクションなどにあると論じる。今日の闘争時代では、非差別的大量移民政策や多文化主義とＰＣに反対することへの罪悪感に基づく歯止め・躊躇は失われつつあると指摘する（カリフォルニアのヒスパニックの多文化主義・二言語主義や不法移民への福祉反対の動きとトランプ候補への投票の拡大をみて、マイノリティさえ多文化主義、大量移民政策に反対していると強調する）。

次の第四章は英国を事例とする闘争状況を論じる。議論の骨格は、ここでも同じである。英国では第二次世界大戦直後より英連邦諸国から戦後経済の復興のための労働力不足を補うため大量の移民労働者を受け入れていた。その多くがムスリム系移民だったこともあり、一九六〇年代より保守系白人国民の間に文化・生活・安全保障不安が高まりつつあった。一九六八年には、イーノック・パウエルの悪名高い「血の川」演説が登場しており、移民政策への不満は大いに高まった。その後の英国保守政権はＥＵ加盟後も移民受入れに消極的だったが、英国内では非白人移民によるものだけでなく、白人至上主義者による都市人種デモ・暴動がはじまっていた。一九九七年に登場したブレア労働党政権は「第三の道」として、一方で新自由主義経済政策を受容し大量移民政策を採用した。他方でリベラル左派進歩主義者の影響を受けカウフマンが批判する不均整な多文化主義の導入にともない反人種差別のＰＣ圧力を拡大するとともに英国社会の急速な多文化社会化を押し進めた。

ブレア政権はこれを受けて「クールな英国社会」をスロ

ーガンとして新しい非白人移民や極右による暴動を抑えるための国造りを試みたが、その時期は既に英国は英連邦からのムスリム系移民の定住に加え、EUの東方拡大に従って、英国にも旧東欧諸国からのEU域内からの移民も拡大し、保守系白人国民の文化・社会・生活安全不安がさらに強まり、BNP（英国国民戦線）などの極右勢力の活動が活発化するとともに、国民からのBNP支持が都市部を中心に高まっていった。このような闘争状態のなかで、英国では米国とは違いポピュリスト大統領トランプのような右派の指導的人物が登場する代わりに、英国のEUからの離脱を求める「英国独立党（UKIP）」への支持が急速に高まり、EU離脱派国民とEU残留派国民との間の闘争が強まっていった。大量移民反対と伝統文化・言語・生活様式・生活安全を求める保守系白人のエスニック・ナショナリズムとEU残留と多文化社会英国を求める白人左派のシビック・ナショナリズムの対立闘争社会となった。保守党は当初はEU残留を目指していたが、保守党大物政治家ジョンソンとゴーブなどが離脱派に加わり、UKIPのファラージュ党首とともに離脱運動を進めた結果、僅差ではあったが離脱支持投票が残留支持投票を上回りEU離脱が実現した。カウフマンは米国のポピュリスト・トランプ大統領の登場と英国のEU離脱は想定外の出来事であったと率直に驚きを示している。

第五章は、欧州である。ここでもカウフマンの議論の大要は同じである。欧州各国でも戦後の経済復興・発展のための労働力不足が生じ、アフリカ・中東諸国よりのムスリム系移民労働者の大量移住が進んでいた。当初は外国人労働者としての短期採用であった。外国人労働者制度は七〇年代初め迄に廃止されたものの、その多くは一九七〇年代以降移住者となっていった。しかし、欧州諸国は伝統的移民国家ではなかったので、英系諸国・米国のように多文化主義を積極的に採用した国は少なく、むしろ帰国奨励に励んだため多文化主義への傾斜は小さかった。それでも急速な多文化社会化は保守系白人国民の文化・生活・言語・宗教・生活安全不安を高めていった。そのため多くの諸国で移民受入れ反対と移住制限の強化（西欧社会に同化できる移民だけに受入れを制限する）を求める極右政党や反移民運動が活発化し、英米と同様にポピュリズム運動への国民の支持も高まり、なかには政権に加わる極右政党も登場した。欧州闘争社会の登場・展開である。

その結果、多文化主義を多少とも採用していたオランダやスウェーデンでは九〇年代になって多文化主義を放棄し

て西洋市民文化中心の社会統合と社会結束主義を採用していった。このような状況に至ったのは、欧州の近代世俗主義に馴染まないムスリム系移民とそのコミュニティの増加・拡大が原因だとカウフマンは主張する。

第六章はカナダとその他の英国植民地（豪州とＮＺ）が対象となる。これらの諸国は英国・欧州諸国と異なり、移民国家であり、一九六〇年代後半から七〇年代にかけて積極的に多文化主義を導入していたが、今日でも右派と左派の対立・闘争状況は、今まで論じてきた諸国に比べ穏やかである。それは各国の白人保守勢力が弱いことと、欧州諸国と異なり英国系の伝統的文化・言語・宗教が強く独自のエスニック・ナショナリズムが育ちにくいからである。むしろカナダは米国とのナショナル・アイデンティティの違いを出すために多文化主義を称揚し、豪州とＮＺはアジア・太平洋地域との関係強化のため過去の差別的国家の歴史と決別したことを示す多文化主義や二文化・二言語主義への拘りが強いからである。とはいえ、これらの国々にも闘争は生じた。カナダでは英系カナダと異なる文化をもつ仏系カナダのケベック州においてその傾向が強く、豪州とＮＺでも白人第一主義ポピュリスト政党が登場し、豪州の多文化主義、ＮＺの二文化・二言語主義への批判も強まっている。ＮＺでは、労働党や国民党などの主流政党が政権維持のためにＮＺ第一主義党と連立政権を組んでいる。

第二部の二つの章のテーマは抑圧である。二つの章で扱われる抑圧は、既にみてきたようにカウフマンによれば闘争を引き起こす原因を作ったリベラル左派が非差別的大量移民政策や多文化主義とＰＣによって白人保守派の不平・不満を半ば強制的に押さえつけている状態をいう。白人保守派や極右が非白人移民を抑圧（差別偏見の行使）することではない。

第二部は主に米国が舞台となる。リベラル左派による抑圧がどのようにして生じたのかその歴史を探る。米国では一九世紀半ばまで英系白人を中心とした移民国家であったが故にアングロ・コンフォーミティを中心とした英系文化・言語（ＷＡＳＰ）への同化主義的社会統合が施行されていた。しかし一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて英国以外の欧州系白人移民が急増し白人中心の多文化社会になると、従来からの英系白人中心の同質的同化社会の維持が難しくなった。と同時にこの時代は南部の黒人が大量に北部に移動する時代でもあり、人種差別問題が全米で問題となりはじめた（当時は英系白人以外のアイルランドや南

欧・東欧諸国からの白人移民は、真正な白人と見做されていなかった)。そうしたなかで、近代的でリベラルな自由・平等主義思考をもつ白人が北部で増加し白人保守層に対抗する形でリベラル左派進歩主義・世界主義を標榜する勢力が成長した。英系白人中心のWASPやキリスト教原理主義の福音派を中核とする白人保守層に対する対抗文化と価値観を標榜した。このリベラル左派のなかでも知識人は反人種差別運動や多文化主義運動を展開していくが、このリベラル左派は当初はボヘミアンを中心とする弱小反主流勢力であった。また、第一次世界大戦後から第二次大戦直後までは、米国の大量移民政策が一九二四年の移民規制法により一時的に収まったことから左派の活動は緩やかであったし、白人保守派の不平・不満も背景に退いていた。

しかし、一九六五年の移民門戸開放政策により大量移民政策の復活と不法移民増加がはじまると、非白人と不法移民への人種差別が激しくなったとして、多文化社会への幻想にとり憑かれたかのようにリベラル左派の活動も強化されていった。カウフマンによれば、リベラル左派の活動は白人の過去の差別に対する罪悪感を断罪する宗教運動にも似ており、その活動は公的私的領域にわたる広範囲なものになった。カウフマンはその一つの事例として学会を含む大学闘争を大きく取り上げ、反人種差別活動により大学の正常な授業や学会の研究活動が阻害された状況を指摘する。リベラル左派の活動は学問や言論の自由を抑圧するイリベラルなものになっていると批判する。そして第八章では、リベラル左派が断罪する保守系白人による伝統的文化・言語・生活様式への原初的な愛着に基づく文化・言語を守るための移民政策の見直しや多文化主義の行き過ぎの抑制を求めるエスニック・ナショナリズムに基づく要求は、自らの文化的伝統を守ろうとするアイデンティティ維持という人種的自己利益を求めるものに過ぎず、それが他の人種への圧迫や不利益を引き起こすことがない限り人種差別だと批判することは不当だと論じて章を閉じる。

第三部では逃亡が扱われるが、この第三部は第九章のみで構成される。闘争と抑圧の対立のなか、大量移民と移民の定住と移民第二世代の増大により社会の多文化は進む。多文化社会化の激しい都市部の保守系白人は、自らの伝統的文化・言語・生活様式あるいは生活の安全が失われることに不安を感じて、非白人移民のまだ少ない田舎や郊外に引っ越していく現象が拡大していくが、それを白人の逃亡という。いわゆる社会的分離（セグリゲーション）などと

もいわれるが、カウフマンは白人の退却あるいは避難だともいう。この分離は一定の地域に黒人や非白人移民を集住させて白人地域との分離を行うことも含まれる。この現象は同胞を求めて非白人地域に集住する移民の移住傾向により引き起こされることも多いが、白人集住地域に社会経済的に低い黒人やヒスパニックやアジア系非白人移民が集住するのは、同地域内の不動産業者が白人と非白人の住み分けを行って、白人集住地域の不動産価値を維持しようとすることが原因とされることも多い。この現象は米国だけでなく英国・カナダでも現在は顕著になっている。この分離の結果、多文化の都市部と白人の多い田舎と地方都市地域との明確な分裂社会となっている。

しかし、カウフマンはこの逃亡は、非白人との共存を嫌う保守系白人のみが引き起こしているかどうかについて、各種統計を駆使して確認したところ、多文化都市から地方へと移住している白人は保守系白人のみではなく、リベラル左派系の多文化主義者の若い白人家族も多いことを突き止めている。これは世代的な問題でもある。とくに若い家族は子供の教育を考えて白人の多い郊外・都市近郊で有名私立学校のある地域に移住する場合が多い。また、保守系白人でも高齢者は住み慣れた地域の多文化化が進んでも我慢して住み続けることも多い。ただし、その場合は近隣の非白人と親しくお付き合いするのではなく、地方や郊外に移った遠くに住む友人や親戚の白人とのネットワークを形成・維持している場合も多い。都市部在住の保守系白人でも非白人近隣住民と仲良く共生して親しく付き合う人々も増加しているが数としてはやはり少ない。いずれにせよ多様性に富む都市部の社会的結束や連帯は弱くなる傾向があり、白人の逃亡が引き起こされるので問題だとカウフマンは指摘する。

第四部は参加である。参加とは白人と非白人移民とが仲良く共生することである。そしてそのような参加社会を達成するにはどうすべきか、そのための手順を論じるのが第四部の目的である。第十章では、まず、将来の社会はサラダボウルになるのか、あるいは坩堝になるのか予測する。カウフマンはリベラル左派の予測する多文化社会は分離主義的なサラダボウル型の社会であり、リベラル左派の期待する理想的な多文化社会は幻想に過ぎないと一蹴する。他方で現在の保守系白人社会を中心に多様な非白人を含む移民を同化・融合させて新しいアメリカ人を作り出すという保守系白人に多い坩堝社会への期待も困難とする。

ではカウフマンはどのような社会が望ましいというのか。カウフマンの想像する未来社会は、混血白人が中核となる混血社会である。リベラル左派の想定するサラダボウル型多文化社会は、多文化平等を謳うが、純血白人とその文化が社会の中核を担う。坩堝社会でも白人の混血化が進むが、やはり純血白人が社会の中核だと想定されている。しかし、カウフマンは、現在の多文化社会のなかでは保守系白人による異人種間結婚は一般の人々が想定する以上に進んでおり、純血白人はむしろマイノリティになるか、あるいは消滅してしまうと考える。他方で白人と非白人移民との異人種間結婚は非白人純血移民をも少なくするか、あるいは消滅させるとする。この過程は二一世紀の後半から二二世紀の初めには実現すると予測する。最終的には民族混淆と民族境界の変更が生じて純血白人も純血異文化移民のいない混血社会となると予測する。まさに非混血白人がマイノリティになる社会の登場である。

この混血社会論は、多くの白人にとっても衝撃的だが、この混血社会では逃走、抑圧、逃亡は起きないとする。第十一章ではこの点について考える。カウフマンはこの混血社会でも、かつて米国のWASPとしてアメリカ社会を支配したプロテスタント英系白人の文化・価値観が、欧州系白人と英系白人との混血白人や欧州系白人移民にも広く伝播・継承されていったホワイトシフトが起きたことを念頭に未来の混血社会でもホワイトシフトが生じていくようにすることが肝要だという。保守系白人文化・価値観が社会の中核となっていくならば、闘争、抑圧、逃亡のない安定した混血社会が生まれるとする。カウフマンはこのホワイトシフトを前提として、混血人種のアイデンティティはどのようになるのか検討する。それは二つの文化を足して二で割った雑種的なものではなく、どちらかの人種の文化が強く現れることが多いとすれば、白人混血社会の形成の際に、欧州系白人移民の受入れを優先し、次に非白人移民であっても白人の血を少しでも受け継いでいる混血移民（欧州系白人植民地で多人種国家からの）を受け入れるのがよいとする。白人の血を継承していない非白人の移民の場合は同化に積極的な移民を選択的に入れればよいとする。

保守系白人の文化・価値観のホワイトシフトを実現する社会でも混血住民の間の白人の血の割合・肌の色の違いや、保持する文化・価値観の差に従った社会的序列ができることは十分考えられるが、平等性を重視する白人保守系の寛容に基づく対応により避けることは可能であるし、混血クレオール社会でもメキシコのような階層社会よりは、モー

リシャスのような平等性の高い国家を目指すべきである。いずれにせよ、保守系白人の文化・価値観の維持が重要である。混血白人社会では純血白人マジョリティはいなくなるとしても、白人の民族的アイデンティティや伝統文化・価値観は混血白人社会の中核であり続けるとする。

前章では未来の混血社会でも保守系白人の民族的文化・価値観は中核となって生き延びるとしたが、第十二章では、純血白人は本当に消滅するのかについて考える。カウフマンによれば今日の米国でも小さなコミュニティを形成し頑なに伝統文化を守って孤立しているアーミッシュや伝統的メノナイトのような存在として、非混血白人は存在し続け、ホワイトジェノサイドは起きないとする。国や地域によっては純血文化に拘る人々がマジョリティを形成することがあるかもしれないが（米国のユタ州やイスラエルのように?）、非混血白人がいなくなることはないとしてカウフマンは非混血白人の行方が心配な人々を少し安心させる。

最後の第十三章はホワイトシフトが円滑に進むようにするためにはどうすればよいかについて議論をまとめる。基本的には今までの議論の繰り返しだが、リベラル左派近代主義者による非差別的大量移民政策促進を見直し、急速な多文化社会化と行き過ぎた多文化主義とＰＣによる抑圧の緩和（不均整な多文化主義から均整のとれた多文化主義へ）の実現がまず必要である。そうすればナショナル・アイデンティティに危機感を抱きリベラル左派に反対する保守系白人の態度も和らぎ、極右・ポピュリストへの支持も減り、非白人移民への対応も非差別的で包摂的で寛容なものになる。その結果、保守系白人も開放的な態度を強め包摂的な白人となるだろう。だからリベラル左派の態度からまず改め、バランスの取れた多文化主義に似た多義主義の社会とすべきであるとカウフマンは論を閉じる。

評　価

本書の評価であるが、長々と内容紹介をしてしまったので手短にまとめたい。

本書を読んでまず驚いたのは、未来の社会は混血社会だという指摘である。多文化社会を長年研究してきた者としては、未来も多文化社会であり、各移民集団は受入れ社会の文化・価値観に次第に同化しつつも伝統的文化・言語を維持していくのではないか（ノン・ホワイトシフト?）。受入れ社会の人々との異人種間結婚が増加したとしても民族的伝統はそう容易くは消えないと考えていた。移民の流入が停止した場合には違う結果になるかもしれないが、今

日の国際移民の時代では移民流入は止まらないし、止めることもできない。またグローバルメディアやインターネットの展開で、世界の民族文化の収斂が進むとしてもである。であるならば、多文化社会（平行社会も?）は続くだろうから今後とも、多文化主義的な政策は多少とも必要だと思っていた。今日、近代的世俗主義に馴染まないムスリム系移民増加が文化不適応・不統合問題を引き起こしているとして社会的結束と社会統合が叫ばれ、多文化主義批判が強まる現代社会であってもである（カウフマンは平行社会やテロリストの出現も多文化主義のせいだとする議論を支持しているようだが、評者はむしろその逆だと思っている）。

次に驚いたのは本書全体にわたり多文化主義が最初から最後まで闘争社会の原因だとして批判され続けていることである。まるで百害あって一利なしである。確かに多文化主義者のなかには行き過ぎた主張をする者もいる。受入れ国国民の社会不安や不平・不満の原因になっている面があることは本書のいうように間違ってはいない。PCについても同じである。しかしカウフマンは批判のし過ぎだとも思う。カウフマンのいう多文化主義はかなり急進的で分離主義的なものであり、多文化主義にも中庸でバランスの取れた均整で穏やかなものもある（多分カウフマンのいう多義主義に相当するものもある?）。多文化主義批判者の議論にみられる多文化主義の議論は粗雑なものが多いが、カウフマンの議論も同じかもしれない。また、評者は民主主義の社会は文化・言語の自由・平等と異文化への節度ある差別禁止・寛容性をも強調する人権重視社会だから、多文化主義があろうがなかろうが民主主義社会は多文化・多言語社会になると思っており、多文化主義は民主主義社会の多文化性を自覚しうまく適応するための方便に過ぎぬと思っている。多文化主義の安易な否定は民主主義そのものの否定に繋がると危惧している。

第三に驚いたのはここまで多文化主義を主張するリベラル左派を徹底的に批判してきたのだから当然かもしれないが、未来の混血・多文化社会の問題解決と社会統合に必要なのは、白人社会の民族的伝統文化・価値観であるエスニック・アイデンティティへの非白人移民の異人種間結婚を通した同化・融合的統合が必要だと論じていたことである。多文化主義が登場したのは、むしろそれ以前の同化主義的社会統合政策がうまく行かなかったからだというカウフマンも触れていた歴史をみれば、なんだか可笑しな気分になる。（それに多文化主義はカナダが嚆矢だという議論に触れず米国生まれだという指摘にも違和感を感じる。文化多

元主義ではないのか?）。今日多文化主義の終焉が叫ばれポスト多文化主義の時代になっていて、欧米諸国では多文化尊重から西欧的市民社会文化・価値観を中心とした社会的結束を求める市民権（シティズンシップ）教育が叫ばれ、同化主義的な社会統合を求める時代になりつつあり、カウフマンの議論もその線に沿ったものと思われる。

カウフマンは均整の取れた多文化主義を一方で求めつつも最終的にはＷＡＳＰ的文化・価値観のホワイトシフトが進む混血白人中心の混血社会（生物学的には多様な混血人種が入り混じるが文化・社会的には同質的な社会?）を求めている。白人文化は確かに堅牢であり強いとはいえ、白人混血社会でも従来からの保守系白人の民族的伝統文化・言語等を中心に社会統合を進める際に他の文化に対する配慮はなくてもよいのだろうか。また、白人文化に同化しやすい白人あるいは混血白人を優先的に移民させるというのはいかがなものであろうか。いずれにせよカウフマンは参加には、まずリベラル左派の主張を抑えなければならないという。そうすれば保守系白人も寛容で開放的になるだろうというが、非混血白人の心の広さにどれほど期待できるだろうか（まずはそちらからか）。

最後に驚いたのは本書では、白人の民族文化の存在を顕在化して、非白人移民文化と同等・対抗的なものとして並列に論じ、従来の白人文化の不可視性（白人性の不可視性?）の議論に挑戦するとともに、白人エスニシティへの原初的愛着を強調して、（中庸な?）アイデンティティ・ポリティックスを強く打ち出していることであった。移民同様に白人も伝統文化への愛着とノスタルジアを感じるというエスニック・ナショナリズムの重要性を強調し、リベラル左派の多文化主義とシビック・ナショナショリズムを対比して、前者を高く評価するのはカウフマンが師匠アントニー・スミスのシビック・ナショナリズムでは国民統合は深まらないという議論を下敷きにしているからだ。

いろいろ驚いた部分もあるが、評者としては未来の社会は混血白人文化と多文化の入り混じった混血多文化併存社会だと思うが、混血社会という議論に注意を促した点に賛意を表したいが、一方で混血が進む動きと、混血を嫌う動きも残るだろうし、それがアーミッシュのような小さい動きなのかどうかについては納得いかない部分もあるが、本書の長大な議論のなかにはほかにも傾聴すべきものも多いので、大いに批判的に読み進められることを希望する。

（亜紀書房、二〇二三年、本文・注含み七八二頁）

関根　政美